資　料

障害者の文化芸術活動を支える拠点のあり方等に関する

報 告 書

（骨子案）

令和２年（2020年）11月20日

第１章　「場」の構築にかかる議論の経緯と県内の課題

１　議論の経緯

「滋賀県障害者文化芸術活動推進計画」の策定（令和2年3月策定）

基 本 目 標

多様な人びとが支えあうことにより、障害の有無にかかわらず
誰もがともに、多彩な文化芸術活動に親しみ、活躍する環境の実現

基本的な方向（柱）

「親しむ」「つなぐ・支える」「活かす」の３つの柱をもとに施策を展開

つなぐ・支える	障害者が文化芸術活動を通じて、自らの能力を最大限発揮し、障壁なく社会参加できるよう支援するための「人」や「場」づくり

施策の展開と主な取組（抜粋）

文化芸術を介して時間と場所を共有し、様々な交流が生み出される「場」や「機能」のあり方について検討を進めます。

計画策定懇話会では、障害の有無にかかわらず、誰もがともに学び活動できる場づくりの必要性について多くの意見が出された

【滋賀県障害者文化芸術活動推進計画検討懇話会での主な意見】

- 障害者の文化芸術活動をとおして、多様な人の価値観が集積する「場」を生み出すことは非常に重要。
- 障害の有無に関わらず、多様な人が集い文化芸術に触れあう「場」が県内各所にあり、気楽に関わり合うことで、支える人や障害のある芸術家等が見出され、活動が広がる。
- 多様な人材が共感を持って出会えるための情報発信やネットワークの構築が大切。
- 障害者が文化芸術活動を通して、子どもや高齢者を含む市民と交流しながら共生社会をつくっていく「場」、県内外の実践や研究、人材育成、情報発信を行う「場」、恒常的にパフォーマンスができる「場」の整備が重要。
- 誰もが文化芸術活動に関わり、創って発表できる環境、そして支援者をつくっていくことを考え、みんなが楽しく集まれる敷居の低い「場」が必要ではないか。

障害者の文化芸術活動を支える拠点のあり方等に関する検討懇話会の設置（令和2年7月設置）

２　県内の課題

障害者の文化芸術活動に関する実態調査（市町・文化施設）、障害者団体への聞き取りから

（調査）令和元年７月実施　（ヒアリング）令和元年12月実施

市　町

- 取組を行うノウハウ（専門性）がない
- 職員数が少ない
- 事業を行う予算がない
- 文化芸術と福祉の現場を理解した中間支援人材・組織が必要
- 障害者の文化芸術施策を進めるための相談機関など拠点となる場が必要

など

文化施設

- 鑑賞や創造、評価など様々な場面で、障害者の文化芸術活動を支援できる人材の確保
- 文化施設職員が文化専門知識に加え福祉の知識・経験を深める研修機会が必要
- それぞれの分野や領域を超えて関係者が集う拠点（ネットワークの構築）が必要

など

障害当事者・団体

- 一般の人と一緒に鑑賞することへの不安感
- 情報が入らない（対応サポートがあるか、等）
- 在宅の人が気軽に立ち寄り体験できる文化施設や対応サポートがない

など

文化側

文化施設職員やアーティスト等では、障害の特性を理解して支えることができる人材は少ない。

福祉側

福祉施設や就労支援施設等では、文化芸術活動の専門的な知識をもって支えることができる人材は限られている。

障害の有無等にかかわらず、県民誰もが気軽に文化芸術活動に参加することができるよう、
「触れる場」「創る場」「発表する場」「支援する人が集う場」づくりや、
分野の垣根を越えて文化と福祉の関係者が互いの意識やスキルを共有できる「場」が必要。

第２章　障害者の文化芸術を支える「場」の基本的な考え方

１　「場」の基本的な考え方

関わり合い

○ 障害の有無に関わらず文化芸術に触れあい、多様な人が集い文化芸術をとおしてつながり関係し合えることのできる場

空気感

○ 発表の機会に恵まれ、「楽しい」を感じられる場

○ 人が人を呼び込み、地域や社会との関わりを感じることのできる場

“多様な人が集い、それぞれの人が役割を感じながら関係性を築くことのできる空間”

２　「場」に求められる機能

人 材

○ 人と人、人と地域を能動的に「つなぐ」取組ができる人材

仕掛け

○県民の身近な文化施設等を誰もがいつでも立ち寄れる開かれた空間とし、発表・鑑賞・交流ができるプログラムがある

つながり

○多様な主体が協働・連携して活動を行うために必要な資源・情報を得るためのつながり（ネットワーク）がある

３　「場」の構築の方向性

場	支援拠点としての「場」	**支援拠点の設置** ✓ 文化芸術活動を通じて、人と人、人と地域をつなぐ取組をデザインできるコーディネーターを設置 ✓ 身近な活動の場の補完的な役割（県立文化施設を利用し実施するモデルプログラムの企画等） ✓ 福祉施設職員や文化施設等職員が障害者の特性を踏まえた支援のノウハウを学ぶ機会の充実、人材の育成 ✓ 支援拠点としての役割（「場」同士のネットワーク化） ✓ 人材情報、公演情報、発表や練習場所の情報など、文化芸術に関する様々な情報を集約、発信	広域拠点	（公財）びわ湖芸術文化財団（びわ湖ホール）
	交流が生まれる「場」	**発表・鑑賞・交流できるプログラムの充実** 県民の身近な文化施設等が、障害者や高齢者を含めた誰もがいつでも立ち寄れる開かれた空間とし、発表・鑑賞・交流ができる参加型プログラムの充実 ✓ アクセシビリティに配慮した公演・展覧会の開催 ✓ 参加しやすいワークショップの開催 ✓ 文化芸術に関する様々な情報を発信 ✓ 地域内のネットワーク化	身近な場	・市町立の文化施設 ・公民館 ・福祉センター ・福祉施設

第３章　「場」の構築に向けた取組

1　文化と福祉の双方の知見を有したコーディネーターの設置、人材の育成

文化と福祉の双方の知見を有したコーディネーターの設置。コーディネーターによる障害のある人とない人が一緒に文化芸術を体験して障害への関心を深めることのできるプログラム等の企画。

また、障害者による文化芸術活動に関わる多様な関係者を対象に、現場体験プログラムや様々な支援方法に関する研修等による人材の育成。

2　身近な文化施設等で発表・鑑賞・交流できるプログラムの充実

地域の文化施設や公民館など身近な「場」で、障害者が創造した作品を発表できる機会、鑑賞サポート等に配慮した鑑賞機会、地域の多様な人々が交流しながら文化芸術活動を一緒に体験できる機会を充実し、障害のある人とない人が文化芸術を一緒に体験して障害への関心を深める。

3　ネットワーク機能の充実

県、市町、文化施設・団体、福祉施設・団体、障害者の生活を支える人が、協働・連携を進めるための具体的な仕組みやネットワーク機能の充実に向けた検討を進める。

「人」づくりを進め、各地域に「場」を構築していく

【参考資料】

障害者の文化芸術活動に関する調査結果

市町における文化芸術活動に関する実態調査結果（令和元年7月実施）（全19市町中18市町が回答）

問）障害のある人に配慮した取組や事業をしていないと回答（14市町）のうち、今後も取り組みを検討していない（３市町）・未定と回答（９市町）した理由（複数回答可）

- 職員数が少なく検討できない　７市町
- 予算の都合、事業費を確保できない　４市町
- 何をどうすれば良いのか、ノウハウがない　９市町

問）障害者の文化芸術活動を推進するにあたり、必要となるものは何か。

- 障害者の文化芸術施策を進めるための活動、相談機関など拠点となる場の構築　５市町
- 文化芸術と福祉の現場を理解した中間支援ができる人材や組織　７市町
- 県と連携した事業の実施　１市町
- 障害のある人、また支える人・団体のニーズ把握　５市町

【参考資料】

障害者の文化芸術活動に関する調査結果

県内文化施設における文化芸術活動に関する実態調査結果（令和元年7月実施）

有効回答数43施設（全106施設中）

問）障害者の文化芸術活動の取組を進めるにあたり、地域の文化拠点として文化施設職員が専門的知見によるアドバイス等を行うために必要と思われることは何か。（複数回答可）

- 障害者の文化芸術活動を理解するため、鑑賞や創造、評価など様々な場面で適切に支援することができる人材（コーディネーター）の確保　28施設（60.9%）
- 文化施設職員がすでに持っている専門知識に加え、福祉等の他分野に関する知識や理解、経験を深めるための研修機会　29施設（63.0%）
- 多角的な面から障害者による文化芸術活動について考えられるよう、障害者やその家族、福祉や芸術等の専門家、事業所や文化施設の職員、行政職員、教育関係者、研究者など、分野や領域を超えて関係者が集う拠点の整備（ネットワークの構築）　22施設（47.8%）
- その他　２施設（4.3%）

【参考資料】

障害者の文化芸術活動に関する調査結果

（1） 障害福祉サービスにおける文化芸術活動の取組状況調査結果（令和元年7月実施）

有効回答数150施設（全505施設中）

問）あなたの事業所において障害のある人の文化芸術活動を進めていくうえで必要なことは何か。（複数回答可）

- 時間　79施設
- 人手　97施設
- 活動する場　47施設
- 職員の研修の機会　48施設
- 情報　37施設
- 資金　68施設
- 外部の専門的な知識や指導　68施設
- 発表する場　36施設
- 情報　37施設

（2） 県内障害者団体への聴き取りでの主な意見

- 一般の鑑賞者と混ざって鑑賞できるかという不安があり、文化施設等へ足を運びにくい。
- 文化活動をしたくても、どこに行けばできるのか、障害に対するサポートや配慮があるのかといった情報を得る機会が少ない。
- 身体障害者の多くは在宅の方であるため、こうした在宅の方が気軽に体験できるような施設やサポートがあれば良いのではないか。

「障害者の文化芸術活動を支える拠点のあり方等に関する検討懇話会」　議論の経過

	第 1 回 会 議	第 2 回 会 議
誰にも開かれた「場」とは何か	• 多様な人が集い文化芸術をとおして気軽に関わりあうことのできる場 • 誰もが主体的に関わることができる場 • 誰もが役割を見つけることができる場 • 障害や高齢などという線引きを超える発想や融解していくような場	• 劇場から遠く離れた人の視点も大事した場 • 障害の有無等にかかわらず、地域に住む人の「好き」が集まる場 • する人、みる人、支える人が集う場
「場」に求められる機能は何か	• 能動的に「つなぐ」「つなげる」という仕掛けができる人が必要 • 図書館のように、既にある劇場や公民館が入りやすい雰囲気や環境 • 地域の多様な人が参加できるような仕組みづくり • 情報発信、相談・支援を行うことができる • 地域や社会との関係性やあり方そのものを変えていくような議論ができる場	• 劇場から遠く離れた人が何を必要としているのかを把握すること • 誰もが利用したくなる空気感や、楽しいことが起こっていることが感じられる空気感を感じることのできる居場所づくり • 年齢や障害の有無等にかかわらず、文化芸術を通じて関係性を構築できる仕掛けがあること • 多くの方が支え合える・関わりの持てる仕掛けづくり • 心を許せる時間や仲間がたくさんある状態をつくること • 仕掛けづくりや居場所づくりをコーディネートできる人の配置
「場」づくりに向け、県として取り組むべきこと	• その機能を持った場を総括的に見守りコントロールできる「人」をどう置くのか • 研修やアウトリーチ活動を通じて人とのつながりを地域に拡散していく仕組み・関係者作り • 試行的な仕掛けづくりを進め、地域へと拡散していく仕組みづくり • 多様なコーディネート機能を担うための一元的な情報提供や相談支援体制の構築	• コーディネートできる人を活かすための組織・体制の構築 • つなげる・つなぐ「人」を活かしたモデルをつくる • 文化芸術活動に取り組みたいと思う人と手を取り合いながら併走関係を紡ぐ取組 • つなぐ人には、文化芸術と福祉の創造の知見を有した資質が必要 • アイサ（障害者芸術文化センター）が一緒に関われる文化芸術活動の中間支援的な拠点づくり